

- 1 P 原理派の状況
2 P 上祐派の状況
3 ~ 1 2 P 白龍さんの「落としどころ」とコメント

オウム真理教—原理派の状況

—しかしまあ、あいも変わらず。ポイント性とかはずかしくないのかなあ。

●「ボーディサットヴァ教学強化月間」のお知らせ

修行の土台を固めつつ、ボーディサットヴァとしての意識を高めるために、教学を中心とした教化月間を行なう事になりました。この機会に真理のデータを根付かせ、導きの場でも法則が話せるようになっていただければと思います。詳細は以下の通りです。

◆期間：2007年1月5日～4月27日（計113日）

◆点数のつけ方

〈修行〉

・修行やイベント（勉強会や夜礼などもOK） 30H：1点（300H：10点）

※自宅の場合：1／2換算。※バクティは換算しない。（来道）

・90日：1点

〈導き〉

【1】新規導き ・入会：5点 活動信徒まで：5点

（※活動信徒：最低週1回以上の来道など）

【2】復活導き ・入会：2点 活動信徒まで：2点

◆教学について

・教学は、アレフ教学システム、ステップアップ教学などを中心に（「聖なる愛、それは時空を超えて」もお勧め）。

・テストを受けている時間も点数に換算しても良い。（※今後の教学テストは満点合格に変更）

・その他ビデオ、マハーヤーナ、ご著書、進化、ボーディサットヴァも含まれる。

・CDがあるものはCDをできるだけ活用すること。

◆伝授物：上記の点数制で、5点、10点、15点ごとに「甘露水200ml」「プレーナパワー（大）」（16点以上はなし）

◆法則の宴について

・2007年夏に開催予定・昨年夏のセミナー以降の強化月間のポイントが評価される。

・なお、各強化月間中、ポイントに達しなかった端数の時間は切り捨てられます。

◆その他

—このシステムで行なった修行時間は、従来の修行ポイントカードには、反映されません。

上 祐 派 の 状 況

ふざけた人だ上祐さんは、まあ人の心が判らないか無視をしているか、としかいいようがないのだろう。

それにしても、上祐派の独立はズルズルと伸びるものだ。2006年秋？、2007年1月、2月、そして6月だと。信者を信服させる能力はないから付いていく人が少なく、公安警察からどくつを急ぐな、と言われていたのかしら。

ああ、2007年正月に、上祐派が麻原彰晃さんの本や写真などを捨てる儀式をするような話を聞いていたが、やはりできなかったのですね。

窓口より

以下、東京新聞1月8日記事の、抄本です。

>オウム真理教（アーレフと改称）の上祐史浩代表（44）を支持するグループが、年末年始に行った信者向けのセミナーなどで、一連のオウム事件の現場などを訪れ、被害者の慰霊

>上祐派は社会への適応をアピールしようという狙いがあるとみられ

>上祐派は今年六月をめどに、教団から独立して新団体を立ち上げる方向

>上祐派のセミナーに参加した在家信者や講師役の出家信者ら計十数人が今月三日早朝、東京都千代田区の東京メトロ霞ヶ関駅を訪れた。

>千代田線ホームに集まり、講師役の信者が「二度と事件を起こさないと誓う」と述べ、全員で黙とう。

>事件概要を説明して教団の起こした犯罪であることを再確認

>村上春樹さんのノンフィクション「アンダーグラウンド」の一場面を朗読

>昨年十一月には富士山巡礼の途中、上祐代表ら約四十人で山梨県の本栖湖と精進湖に

>仮谷清志さんの遺骨が、精進湖は、修行中に急死した信者真島照之さん遺骨が、それぞれ秘密裏に投棄された現場。

>上祐代表が「絶対にこのようなことがないように被害者の冥福を祈ろう」と述べ、信者一人一人が菊の花を湖に投げ入れ

>上祐派と対立する反上祐派は「麻原元代表は神のような存在。われわれが勝手に事件の善悪を評価してはならない」などと主張しているとされ、

>高橋シズエさんは「アイデアマンの上祐さんは、どうすると社会の受けがいいかを考える。慰霊も被害者のためではなく、自分たちの組織の存続のためではないか。上祐さんが命じれば信者は従うだろうが、本当に一人一人が反省し、事件に向き合っていないのは明らかだ」と

一応上祐派？だが悩むー白竜さんブログから

総括 2006-11-28 01:30:02 / Weblog

落しどころ

教団における成就の認定の仕方、教祖の側室の問題など、いろいろと今までの教祖や教団のイメージが崩れ去るような内容が、次々と出てきている。これが、全て事実だとすると、私が信仰の対象としていたものは何であったのだろうかという想いが生じてくる。

単なるいかさま詐欺師によって作り上げられた、架空の妄想を信じ込まされていたのだろうか？それとも、これら全てを含め、シヴァ神の大いなるマハームドラーなのであるだろうか？教祖をとんでもないいかさま野郎と切り捨てることが出来れば、ある意味楽かもしれない、そうでなければ、妄想の中に住み、何も考えず教祖を信じ続けるというのも、両極端で楽なのかもしれない。

これだけ事実が明らかになっても、私の中に、あの糞親父！と教祖を切り捨てられない自分がある。なぜ？と思われるかもしれないが、こればかりはどうしようもない。外部の方からは信じられないかもしれないが、嘘でもなんでもなく、教祖を崇拜の対象にしている自分があるのである。これは、長く教祖に帰依をしてきた信徒やサマナには、共感していただけるのではないかと思うが、そんなに簡単に信仰の対象にしてきたものを翻すことは出来ないのである。

心を整理するには、もちろん、時間も必要だし、思索も必要である。今現在、無理にあの糞親父と言ってみたとこで、心が不安定になるか、空虚になってしまうような気がする。18年間、家族や親族に迷惑をかけ、友人・知人と縁を切り、安定した職を離れ、それでも続けてきた信仰である。それは教団の掲げる、衆生の救済と言う大きな目標に賛同したためであった。その全てが無駄であったのだろうか？

当然そんなことはなかったのである。では、どこが有益で、どこが不利益だったのかをしっかりと検証していく必要がある。

この問題は、今教団に残っている人達一人一人が、自分なりの納得のさせかた、自分なりの心の落しどころを見つけ出さなくてはならない問題なのである。他人が、どうこう口の出せる問題ではない。

今、教団の内部でも、大きく心の揺れている人がいるかもしれない。ブログを作っている私も、心の整理がついたから書いているのではない。心の整理をつけるために書いているのである。

事実に対して恐れ、目をつぶるのではなく、今見えている事実をきちんと分析し、どのような行動をとればよいのかをしっかりと考えなくては、今後の自分を確立していくことは出来ない。

教団に残っている方の中には、非常に精神的に不安定になっている方もいるようである。精神病院に入院させられた方もいるというし、薬を常用している方も一人や二人ではないと聞いている。

これから、サマナは住居となっている施設が経済的に維持できるかどうか、かなり苦しい状況になってくるだろう。当然、引越しも余儀なくさせるかもしれないし、今より多くの人が、外で働かなくてはならないような状況が出てくるかもしれない。いよいよ施設が維持できなくなれば、実家に戻らなくてはならない人も出てくるかもしれないのだ。

来年には、上祐氏による新教団の旗揚げも予定されている。今年から、来年にかけて教団内では、大きな変動が予想されるが、個々人においても、精神的に大きな変化が起きることが予想される。その際に、自らの心をしっかり保てるための下地を、今から作っておく必要がある。教団に流される時代は、まもなく終わりを告げるのである。

先ほど、自分なりの落しどころという話をしたが、これを書きながら、いろいろ思索していくうちに、次のような見解にたどり着いた。もちろん現時点での「私なりの」落しどころであるということをお断りしておく。

宗教的な観点から見た場合に、総てのものは無常の法則のもとにある。よって、教団といえども、グルといえども無常の法則から逃れることは出来ない。生じたものは滅するのである。しかし、無智である私たちは、グルだけは特別、真理の団体だけは特別であると、未来永劫変わらないかのような錯覚をしてしまった。それを知ったシヴァ神は、弟子の無智な識別を崩壊させるため、教団を破壊へ導こうとし、みっともない、えげつないグルとなって弟子の前にその姿を晒しているのである。

釈迦の入滅の時、同行していたのはアーナンダであった。釈迦は、チュンダの供養を受けた後、猛烈な下痢に襲われ、死を迎えることになる。その時、アーナンダは、家の戸の横木に寄りかかって泣いていた。それを知った釈迦は、このように言った。

「やめよ、アーナンダよ。悲しむな。嘆くな。アーナンダよ。わたしは、あらかじめこのように説いたではないか、――すべての愛するもの・好むものからも別れ、離れ、異なるに至るということをおよそ生じ、存在し、つくられ、破壊さるべきものであるのに、それが破壊しないように、ということが、どうしてありえようか。」

アーナンダがこのように釈迦に執着し、その臨終に際して涙を流すようなステージでの者であったから、世尊ですら、無常の法則から逃れられないのだということを教えるために、自ら下痢で苦しみ、死ぬ姿をアーナンダに晒したのではなかろうか。それが、ア

アーナンダに対する慈悲の実践だったのだろう。釈迦の入滅の時のアーナンダとのやりとりを読んでそんな感想を持った。

したがって、グルや教団にしがみつけばつくほど、強烈なシヴァ神のカルマ落としが起こるのではないだろうか？シヴァ神は元々が破壊を司る神である。我々がしがみつくと、執着の対象を破壊するのである。それが例え愛するグルや教団であつたとしても同様である。それが、シヴァの本質なのである。

しかしながら、シヴァの破壊の後には、ブラフマンの創造があるのである。絶望の後には希望がある。その流れの中に、上祐氏の教団分裂があり、私の暴露ブログやシヴァの喜びさんのブログが存在するのかもしれない。最近、シヴァの喜びさんがやろうとしている、現や元の人達を対象にした、ヨガ教室の歩みなども、この流れに組み込まれたものなのかもしれない。

教団は今後、崩壊していくかもしれないが、逆に、新しい道が生じてくる可能性もある。それは何か？修行者が自らの足で歩くという道である。今まで、おんぶにだっこで、教祖から与えられるものを、ただただ吟味もせず真似をしていただけの幼子が、自らの足で歩き出すのである。

私が思うに、現在ある教義に、間違いが含まれている可能性もあるのではないかと考えている。子供を賢く育てたいと思う親なら、あえて問題に間違いを入れておくはずである。そして、子供にいろいろな文献を調べさせたり体験をさせたりして、その間違いを自分の力で見つけ出させるようにしむけるはずである。

甘えさせることがシヴァの愛ではない。本当の意味で、無常を悟らせ、修行者としての自立を促すことがシヴァの愛なのではないだろうか。

2006-12-02 01:32:06 / Weblog

「落としどころ」 part2

11月28日の「落としどころ」のところで、書いたように、全てがシヴァの現われであるという結論に達してから心が落ち着いた。グルや教団から離解脱していく経験は、大いなる魂の流れの中であって、学ばなくてはならないことだったのだろう。

したがって、キリストのイニシエーションの時に見た、シヴァとグルの合一これは正しかった。しかし、私の意識が教祖に限定されていたため、見る事が出来なかったが、全ての人々がシヴァの現われだったのである。

私も初めての経験であつたが、宗教的な心の問題は、宗教的な決着の着け方をしないと、心が納得しないということが分かった。

今まで、偉大なグルという意識と、グロテスクなグルという狭間で心が揺れ動いた。片方を立てれば、一方が頭をもたげてきて否定をする。あちらを立てればこちらが立たずで、どうにも按配が悪かった。

しかし、弟子の救済のため、もともと麻原彰晃の中には、その二面性が存在していたのだ。崇高な理念を掲げ真理に導くグル。これによって多くの弟子が引き付けられた。しかしながら、同時に彼は、腹の中に、時限爆弾を仕込こんだ存在でもあったのである。

ある一群を為す者は、似たカルマを持つと考えられる。おそらく、我々は、素直ではあったが、グルや教団に過剰に依存をする魂の傾向を持った者だったのだろう。したがって、シヴァは、大いなる慈愛をもってこれを落とそうとした。

そこでまず、謙虚な姿勢を見せ、明確な真理の法則を解き明かし、質疑に対する明快な回答を弟子に与え、弟子を信頼させた。そして、次第に絶対的な存在となるまで、自分を信じさせるように弟子をしむけたのである。究極の段階まで弟子が信じきった時に、腹の中の時限爆弾が爆発するようにセットされていたのだろう。

まさに、事件によって教団は爆発炎上したのである。そこからのグルは、まったくみともないことこの上ない姿を晒し続けているのである。次々それまで仕込んでいた、悪行三昧の数々が暴かれ、弟子を絶望のどん底に叩き落としたのである。

すなわち、このプロセスこそ、我々が、グルや教団というものに対して持っていた、過剰な執着をそぎ落とされるプロセスだったのだと思う。

教祖の歌の中に救済の構図 part 1 があるが、あの中で、弟子のために降りてきたことを明確に歌っているではないか。そして、教祖は、失敗をさせながら弟子を育てるグルではなかっただろうか？また、説法の中で、今生の私は、ピエロなのだとも言っていた。そこに、私はシヴァの姿を見る。崇高な理念を説いた麻原もシヴァの現われなら、グロテスクな麻原もシヴァの現われなのである。全ては、私達を次のステップへ導くためのシヴァの現われであったのだろう。

そう考えると、全ての教団の構成員も同様に、それぞれが、それぞれの悟りへ導くために存在しているシヴァの現われと見ることが出来る。A派の人達のM派への排斥の姿も、我々を教団に対する執着から解き放つ役割を担ったシヴァと見ることが出来るし、M派は、グルの執着から引き剥がそうとするシヴァと見ることが出来る。個々人も全てこの中のキャストであり、他人は自分を悟りへと導いてくれるシヴァであり、自分は他人の悟りへと導くシヴァとなっている。全てがシヴァの現われなのである。

そのように、結論付けた時、視界が広がった。教団を辞めると、未来際において真理に巡り合えなくなり、地獄に落ちてしまうかもしれないという恐怖が消えた。グルを否定したくなくても、否定しなくてはならないのかという葛藤も消えた。互いが互いを否定している者に対する嫌悪も消えた、全てを包括し、シヴァという一元に結びつけた時、

もつれていた糸が全てほどけた。逆にそのような状態を作ってくれ、悟らせてくれた方達に感謝しなくてはならない気持ちにさせられた。

そして、事件によって失われた方々もまさに、この全ての現れの中に存在したのである。まさに、我々のために犠牲になられたのである。教団の一部の者が、勝手にやったのではないのだ、形としては確かに、一部の者が勝手にやったように見えているが、そうではない、全てはつながっている。互いの悟りのために、全てはつながっているのだ。

そう考えると、私のために多くの方々の命が犠牲になり失われたのである。そのような結論になる。めまいのしそうな想いだ、結論付けるとそうなるのである。各自が、殺人は自分のために行われたと認識した時、はじめて、そこから、私たちの本当の謝罪と、賠償が始まるのではないだろうか？

もちろん、「落しどころ」の時にも書いたとおり、各自の落しどころはそれぞれある。自らの落しどころは、各自模索していくしかない。もし、私の、落しどころが少しでも皆様の参考になれば幸いである。

2006-12-14 18:36:35 / Weblog

友北先生への返信

友北先生のブログから転載

『 どもっ、

私、白龍さんの言いたいことは分かるつもりではあります。

被害者、また殺した実行犯らのことを我が身として感じようとするとき、宗教的には自らのものとして深い謝罪とありがたさを感じる感覚、それはあるのだろうと。

でも、被害者らはそれを勿論求めていないし、実はそんな感覚を許しもしない。

被害者の代わりに死ぬのでもないのに感謝を勝手にするな、死刑になる人の代替をするのでもないのに勝手なことを言うな、という感覚です。

それは「宗教者」の傲慢でしかない、となってしまうんじゃないかなあと。

それは、上祐が今、「衆生を愛したい」なぞと、おぞましいことを言っているのと50歩100歩に感じられるものです。

豊田被告もいろいろ考えて反芻しているでしょうけれど、「日々重くなります」と述べて、決して表に出さないです。

それは、自らの考えなど言えるものではない、更に1カルパ150億年？の中で、今自分が生きていることそれ自体が実は奇跡だったんだ、ということを知ったから、だと感じます。

豊田被告と面会しましたが、自分として緊張の時間でした、彼は、死ぬということの重さをもう現実を感じていたから。

死んだ人とはもう会えないです。来年も再来年も、10年後も、100年後も、何万年、何十万年、何億年たっても。

今は生きている者として期待するのは、自分が死んだ後にあの世で会えるのかも、と思うことだけです。先に死んだ人とはいろいろ話したいなあ、と思います。誰であっても。

井上被告に対する一審判決では「決して宗教に逃げることなく」と説示されています。それはそんな口上も感覚も許さないからです(裁判官がそこまで言うのは凄いことなんです)。

で、気がむかれましたらとして勧めるのですが、豊田君の友人で証人にも出た「さよならサイレントネイビー」の筆者が敢えてしたように、ビニール傘を持って、例えば林泰男被告だったら午前8時頃の中目黒始発東武動物公園行き電車に乗って、イメージしてみたいのです。周囲の8人が苦しんで死に、さらに多くの人が苦しんだことを。

(林被告、少しはずるかったり危ない人であって欲しかったのですが、面会してみればいい青年なんです。参ったです。彼に対する一審死刑判決で異例のことに「およそ師を誤まるほど不幸なことではなく、この意味において、被告人もまた、不幸かつ不運であったと言える」とあるのは、そのとおりでした)。

少なくとも、第一上九の慰霊碑などにも行ってみるとか。あそこは何人も死んで、大きな電子レンジみたいので長時間かけて何人もが焼かれ、またご自身がキリストのイニシエーションをやったところでもありましょう。

ああ、鎌倉の円覚寺内、松嶺院内の墓には何人か元幹部を案内しました。坂本一家3人が眠っています。坂本はいい奴でした、同い年。

それぞれ、麻原さんの一審判決文に示される事件内容は必ずや把握して。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/trial/4-6.html>

現実感覚と言うもの、それが戻ってきたときはあまりに重いです。

現実感覚を踏まえたうえでの思想でなければ、宗教でなければ、哲学でなければ、実は酷く病的だったり皮相なものだろうと思うのです。』

[返信]

それでは、ここから返信させていただきます。

「私、白龍さんの言いたいことは分かるつもりではあります。被害者、また殺した実行犯らのことを我が身として感じようとするとき、宗教的には自らのものとして深い謝罪とありがたさを感じる感覚、それはあるのだろうと。」

このように書かれておりますので、友北先生は、おそらくある程度私の考えを、ご理解いただいているものと推察いたします。しかしながら、被害者の感情を考えると、

「でも、被害者らはそれを勿論求めていないし、実はそんな感覚を許しもしない。被害者の代わりに死ぬのでもないのに感謝を勝手にするな、死刑になる人の代替をするのでもないのに勝手なことを言うな、という感覚です。それは「宗教者」の傲慢でしかない、となってしまうんじゃないかなあと。」

という発言が出てくるのであろうと思うわけです。被害者の方々の感情としては、友北先生のおっしゃる通りでありましょうとしか言いようがありません。それに関して、私は反論するつもりもなければ、反論できる立場にもありません。

それでも、いくつかの点で指摘しておかなくてはならないのは、私は、直接犯罪をしていないということ。単なる、末端の一信徒の身であり、教団を代表する立場にあるわけでもなく、運営に携わっている者でもないということ。それと、このような視点を持ったことで、私の中で、事件に正面から向き合おうという下地がようやく出来上がりつつあり、グルである教祖からの脱却が可能になったということの3点をまず踏まえていただきたいのです。

私が、直接犯罪に関わり、殺害に手を貸していたというなら、当然このようなことを言うわけでもないですし、自分の心情を公表などするわけがありません。ただひたすら、自分の罪を償おうとするでしょう。また、教団の代表者であり、教団運営に関わっているというなら、当然教団の総意として受け取られかねない立場として、絶対このような内容のことを発言しませんし、公表したりはしません。私は、単なる末端の一信徒であるから発言したのです。

そして大事なことは、私のメッセージが、現在教団にいる信徒・サマナの方々に向けてのメッセージであるということです。外部の人間でもなく、上からの押し付けの情報提供でもなく、一番下の信徒が教団内部の人間と同じ目線で、悩み苦しみながら、いかに自分を見つめようとしていったか、事件を捉えようとしていったかを示すことで、少しでも今残っている人達の、気付きに繋がれば良いと考えて書いたものだということです。

何度も書きましたが、私はつい最近まで、オウム事件はユダヤの陰謀であり、国家の

でっちあげだと考えていました。私は今まで自分がマインドコントロールをされたことなど、一度もないと考えてきました。全部自分が好きで学んできたことですから、マインドコントロールなどされたことがないと、実際友人達に断言してきました。しかし、そうではなかったのです。強制的な情報コントロールこそされませんでした。が、教団全体、信徒一人一人が互いにマインドコントロールをしてきていたのです。ゆるやかだが、確実に根付くマインドコントロールです。

正直、現在の私達の状態は、精神的病とも言うべきものだとは私は考えています。この精神的な病を癒すには、時間と段階的治療が必要だと考えています。確かに、事件から11年という時間は過ぎていますが、実際教団の内部の現状が見えてきたのは、分裂騒動以降ですから、ここ1、2年です。内部の人間も、いろいろな事実を突きつけられて、精神的に揺れ動く人が出てきました。ようやく時が至ったのでしょうか。

次に、宗教に染まり宗教的な思考、生き方を目指してきた者にとっては、サリン事件や教団内部で隠されてきた数々のひどい事実と、各自の理想とした宗教的实践をどのように関連させ解釈し、宗教的決着をつけるかということは、非常に重要なことなのです。なぜなら、我々にとって、まさにそれこそが人生の目的や生きる糧に直結しているからです。ここを、クリア出来ないと、次のステップになかなか踏み出すことが出来ません。決着がつけられない者は、陰謀論に逃げ込み事件を否定するか、知らん振りして引きこもるしかなくなります。

もちろん、前にも書きましたが、このような煩わしい手続きを経ずにすんなりと、事実と向き合い、教団から離れてしまう人もいます。しかし、そうではない人達もいます。今残っている人達は、私も含め、ある意味重症になってしまっています。長ければ長いほど、真剣に取り組んだなら取り組んだだけ、心の開放が難しいような気がします。

今までの、20年間近く、正しいと思い実践してきた全てを否定すると、生きる意味を失い、生きる目標を失います。おそらく、虚無的になるか、自暴自棄に陥るでしょう。教団の人間にとって、それは自分の人生の死を意味すると考えます。だから、事実を認めることに恐怖が起きます。よって、事件も数々の教団内部の悪業も認めたくないのです。

こういった中であって、一元思想と言うのは大変便利な考え方で、あちらを立てせようとすれば、こちらが立たないというような状況にあっても、全てを丸く治めることが出来る妙薬と言うことが出来ます。この薬を使って、まずは、患者の波立った気持ちを落ち着かせる必要があります。次に自分の何処が病んでいるのか、本人に気付かせなくてはなりません。そして本人が自分の病に気付いてから、本当の治療が始まるのだと思います。場合によっては、周りの人達の助けを借りながら、治療を進めていくということもあろうかと思えます。重症患者には、このような段階が必要ではないかと考えます。

たしかに、いびつな思考かもしれませんし、皮相な考えかもしれませんが、まずは自分が病気なのだと気付く前段階で、パニックになって、不安定になっている心を安定さ

せる必要があります。したがって、このようなやわらかい処方箋を与えるしかありません。ここを、クリアして、事実に向き合うことが出来るようになったら、真実を伝え、自らの心と向き合わせるようにすれば良いと思われます。そうすれば、おのずと自分の為すべき行動が見えてくると思います。

しかしながら、現在私がこのような心情を吐露したことによって、被害者の方々が感情を害されたとするならば、その点は如何様にもお詫び申し上げます。出来ますれば、私の発言にはこのような意図が含まれていたのだということを、ご理解いただきましてご容赦いただければ幸いです。

Unknown (Unknown) 2006-12-15 02:17:27

>私はつい最近まで、オウム事件はユダヤ
>の陰謀であり、国家のでっちあげだと
>考えていました

あ、つい最近までだったのですか。見落としていたのかも。済まないです。
返信、ありがとうございます。白龍さんの誠意は、実によく分かります。
どうぞ、時間をかけてボチボチとまたいつか考えてみてください。

そして、この段階でのご自身の総括、そして今回の返信は、大変に貴重なものだと思います。自分の心を率直にそして詳細に分析されていること、敬服します。
私、公開されたブログであったので、以前のコメント欄に続いて、まとめた対応文を書いてしまった者です。が、やはり、大人気ない対応、良くない対応だったかと思います。アイデンティティクライシスという状態は見えていても実につらいものですね。何のための20年だったか、と感じてしまう。
そんなときはカナリヤサイトの手記などもご参考にして下されれば幸いです。

初冬になってきてしまいました。時に散歩したりするのもいいものです。生きていること自体が奇跡なんだ、という実感が湧きます。例えば病の治りかかりなどは、自然の中に動きを見て命を感じやすいものでもありましょう。 では。

ぼんちさん (友北) 2006-12-15 02:23:06

あっ、前の書き込みは私の書き込みです。それで、余計ながらぼんちさん
>理知的に総括し理解することを優先するのか、
>被害者の慰撫を最優先させるのか、

これが矛盾するものだとしたら「理知的」ではないように思いますが。頭でっかい的なあと、
なお、ぼんちさんに「慰撫」なぞされたくないですう。どもっ。

友北先生 (白龍) 2006-12-15 02:26:44

>私、公開されたブログであったので、以前のコメント欄に続いて、まとめた対応文を書いてしまった者です。が、やはり、大人気ない対応良くない対応だったかと思います。

いえいえそんなことはありません。

おかげで様で、さらに自分の考えをまとめる助けになりました。

>アイデンティティクライシスという状態は見ていても実につらいものですね。何のための20年だったか、と感じてしまう。

実は、私などは、これが一番恐怖を感じました。

自分の立っている足場の底が抜けるような、

そんな感覚を味わいました。

>そんなときはカナリヤサイトの手記などもご参考にして下されれば幸いです。

いろいろと、参考にさせていただきます。

コメントありがとうございました。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>

かなりや

西條八十

唄を忘れた金糸雀は、

後の山に棄てましょか

いえ、いえ、それはなりませぬ

唄を忘れた金糸雀は、

背戸の小藪に埋けましょか

いえ、いえ、それはなりませぬ

唄を忘れた金糸雀は、

柳の鞭でぶちましょか

いえ、いえ、それはかわいそう

唄を忘れた金糸雀は

象牙の船に、銀の櫂

月夜の海に浮べれば

忘れた唄をおもいだす

『赤い鳥』(大正七年一月号)
岩波文庫『日本童謡集』より

◎ カナリヤは歌を思い
出す手助けをする。

◎ カナリヤは自分で自
分の歌(考え)を歌う。

◎ カナリヤは歌を歌え
なくなつた鳥を捨てる
のではなく、温かく見
守る。

(地球の揺りかごで)

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中心 2-1-15 パークロード大和ビル S階

大和法律事務所 窓口 滝本太郎 気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitara@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1 3 4 3 0 7 8 カナリヤの会 滝本太郎